個性を紡ぎ織りなすよりどころ

ー異なる『個性』とともに生きる住商空間の提案ー

人は他者とともに生きることで自己を知り、形成していく。「他者との違い」は自己をより豊かな存在へと導く。
一方で現代社会においてその「違い」は生きづらさの原因ともなっている。
同じ「違い」であるのにマイノリティであるだけで「生きづらい違い」になってしまうのはなぜだろう。
他者との違いが形成する『個性』を介して暮らしの中で
ともに生きることの価値を最大限引き出す『個性』とともに生きる建築を提案する。

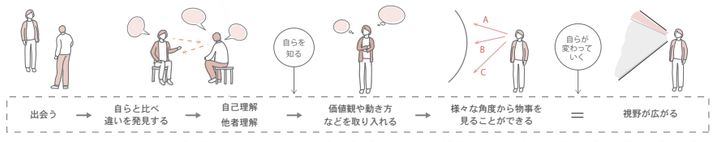
00. 構想

現代社会にはマイノリティであるという理由だけで「生きづらい個性」を持つ人々がいる。

しかし誰もが皆「個性」を持っていて、だからこそ誰もがマイノリティであるのではないだろうか。

属性だけで決めつけないつながりが日常的に関わる人の中にあることで生きやすくなる。

01.『他者』とともに生きることの最大の価値



『他者』を介して自らを知り、また自らが変わっていく」とはどのように起こるのか。様々な事象を通した分析から上図のような過程があると考えた。そこから本提案では「視野が広がること」を「他者」とともに生きることの最大の価値とする。

02. 社会背景

1. 日常で関わる人の減少

かつてはひとつの住宅に親子二・三世帯で暮らす拡大家族が一般的であり、近所付き合いも活発に行われていた。そのため日常の中で関わる「身近な存在」が多く居た。

ライフスタイルの変化から住宅は個人あるいはひとつの家族のためにつくられた閉じた空間となり、仕事や生活の利便性に合わせた引越しにより定住率も低下し、地域コミュニティは希薄化した。

日常の中で関わる人の数が減少し「身近な存在」と言える人は限られるようになる。その結果、他人との違いに気が付く機会が減少したことで視野は狭くなった。

2. 人間関係の広範囲化による生きづらさ

周囲の人々と助け合いながら暮らしていたため相手を知る機会が多くあった。そのため属性や見た目だけに捉われずに相手を見ることができ本質的な関係が築かれていた。

インターネットやSNSの普及により世界中の人々と繋がることが可能となり人間関係は広範囲化した。また一方的な意見を知るだけで知った気になってしまうことから情報や知識の偏りが起こる。

人間関係の広範囲化による表面的な関係の増加や、思い込みや決めつけによって差別や偏見が起こり、知らないうちに「生きづらさ」を与え合ってしまっている。

03. 問題提起

日常で関わる人の減少によって視野が狭くなり、知らないうちに「生きづらさ」を与え合ってしまっている。そんな他者に対して「何となく知っているけど“他人ごと”」である現状では『他者』を介して視野を広げることが十分に起こっているとは言えない。そこで『他者』とともに生きることの価値を最大限引き出す新しい暮らし方を提案する。

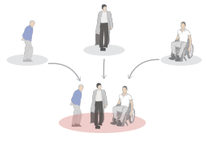
04. 他者 / 『個性』

「視野を広げてくれるもの」は自分にはなかったもの、つまり「他者との違い」であることから他者がいることで初めて気づくものである『個性』が本提案の他者に相応しいと考え「他者 ＝ 個性」とした。ここで「他者」とは固定された存在ではなく誰かの『個性』が「他者」となり、時には自らの『個性』も「他者」となるものである。この個性が視野を広げる循環によって『個性』とともに生きる関係は広がっていく。

05. 提案 /『個性』とともに生きる建築

他者に対して「他人ごと」である現状を、日常で関わる人を増やしさらに他者との違いに気が付きやすい環境を整備することで「自分ごと」に変えていく。

STEP1 暮らしを近くに

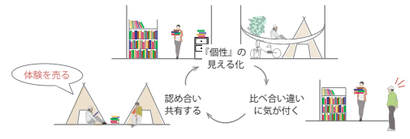


シェアハウスや貸しスペースなどの場の共有により暮らしを近づけ自然と互いを知る機会を増やし、視野が広がりやすい環境をつくる。

STEP2 『個性』の見える化

生活機能スペースを最小限に抑え、人通りのある道側に『個性』の因子である「好きなこと」や「得意なこと」を楽しむ空間を集めることで『個性』を見える化する。

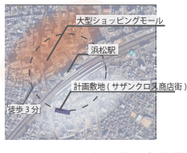
STEP3 『個性』を共有



詳しい人に教えてもらったり、得意な人に作ってもらったりなど他者の力を借りたり体験したりして『個性』を共有することで互いの理解を深める。さらにその体験を売ることで利益と交流を生み出し、より『個性』を磨くことにもつながる。

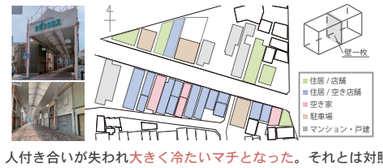
06. 敷地 / 静岡県浜松市 サザンクロス商店街

■ 静岡県浜松市



浜松駅の北側は開発が進められ発達し、商業的機能のほとんどが北側に集中したことで南側が駅ウラ化した。外国人、特にブラジルなどの南米出身者が多い。また「やらまいか精神」=「あれこれ考え悩むよりまず行動しよう」という特有の精神があり新しいことに挑戦する行動力と受け入れる力がある。

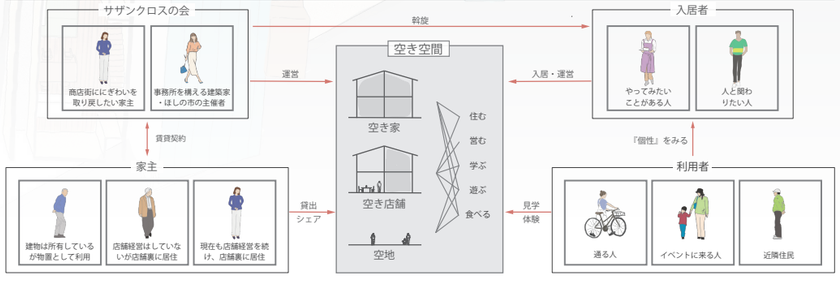
■ サザンクロス商店街



家主の高齢化により多くは閉店しているが、住居と店舗が一体となって設計されているため空いた空間を他者に貸すことが難しく、殆どが住宅のみとして使われ空き店舗が多く存在する。月每に「朝市」「ほしの市」というイベントが開催され賑わいを見せているが店舗のシャッターは閉まっており、人がいるのに活用されていない空間となっている。

駅北側では開発が進み高機能な商業施設が整備された反面、人付き合いが失われ大きく冷たいマチとなった。それとは対照に本提案では、駅ウラにある、かつては人との関わりをも訪れる目的となっていた商店街を舞台に生きづらい人達のためのヒューマンスケールなあたたかいマチを形成する。

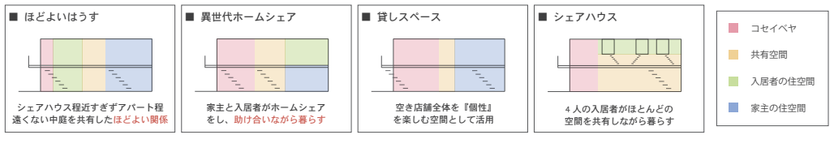
07. スキーム



08. 建築提案

1. 4つの建築形態

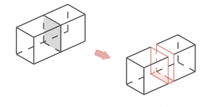
家主の暮らし方に合わせられるように家主や入居者の暮らしとその距離感から４つの空間構成を用意。



2. 増減築

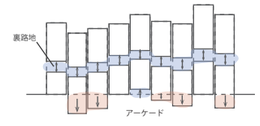
浜松市の「空き店舗利活用事業費補助金制度」を利用し建物を増改築することで商店街が抱える問題の解決を図ると共に、『個性』の見える化を促す。

■ 貸すための減築



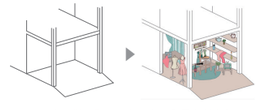
他者への貸出を可能にするため、住居と元店舗部分の間を減築し中間領域を設ける。この違なりが店主と入居者をつなぐ裏路地を形成する。

■ 増減築による視線誘導



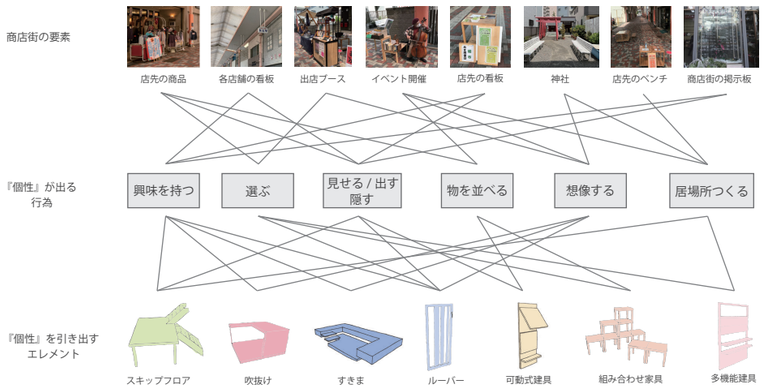
アーケード側の増減築によって動線を操作する。道を通る人の視界に自然と『個性』が入り込み、知るきっかけとなる。

■『個性』のヘヤ化



コセイベヤの壁を取り払うことで入居者が自らヘヤを作り上げていく。何でどのようにして領域を作り出すのか、建築自体も『個性』によって変化する。

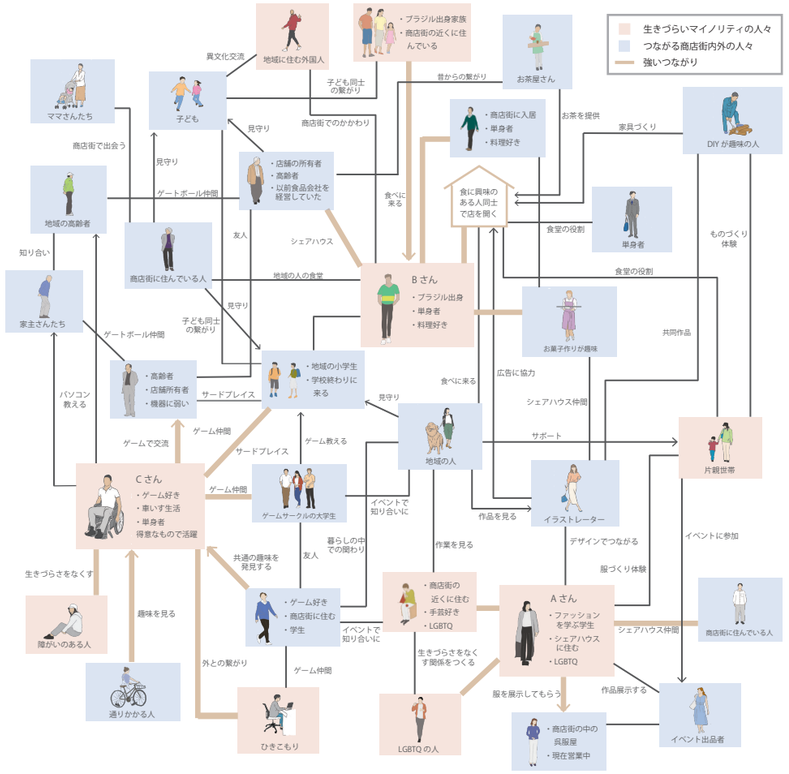
09.『個性』を引き出すエレメント



空き店舗の増加により『個性』が失われつつあるサザンクロス商店街に残る『個性』が見える要素を選出し、それらから『個性』の出る行為を抽出した。それらの行為を組み合わせ、かつて商店街で見られた「個性」の立ち並びを再び引き出すためのエレメントを作成した。これらを建築内に組み込む、または入居者が取り入れることで「個性」の見える化を促す。

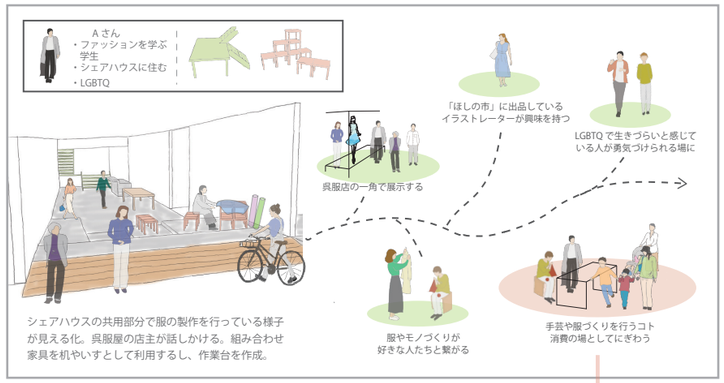
10. つながり

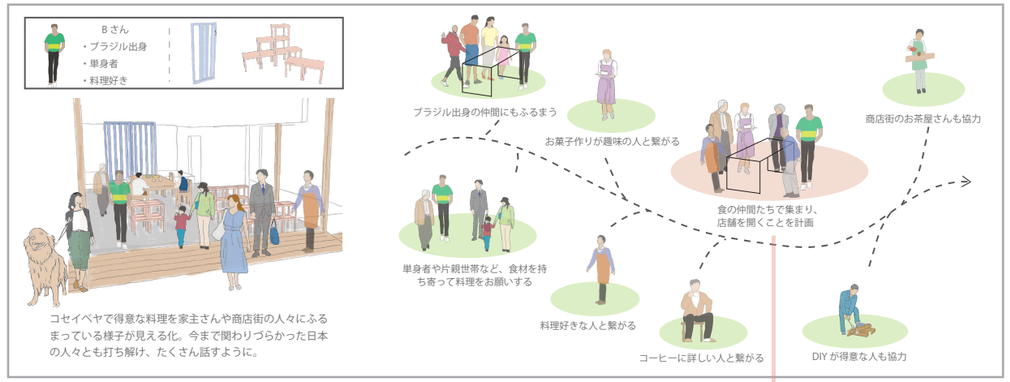
生きづらいマイノリティを持つ人々と商店街内外の様々な個性を持つ人とのつながり。

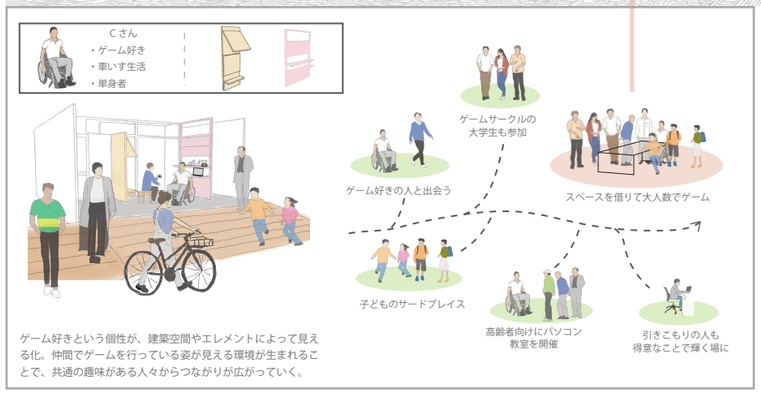


11.『個性』の見える化で始まるものがたり

10. つながりの多くの人々の中から A さん、B さん、C さん 3 人の住人のくらしをピックアップする。

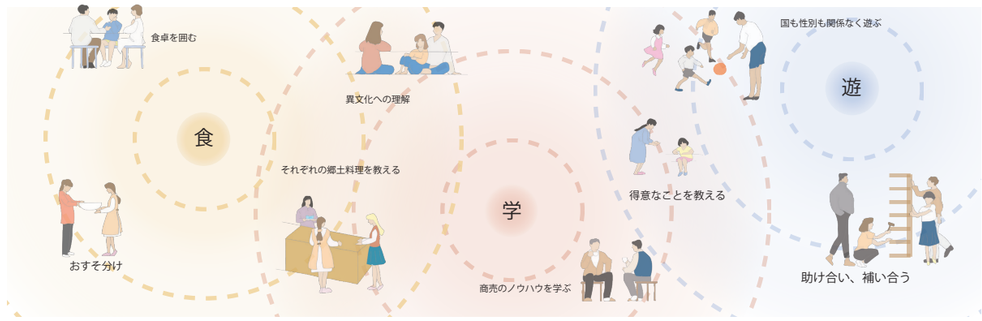






12. 日常での交わり

『個性』の見える化をきっかけに「料理を振る舞う / 教え合う / おすそ分けする」「得意なことを活かして助け合う / 子供たちや高齢者の方々に教える」などの交流が日常的に起こる。



13. イベント /『個性』を共有する

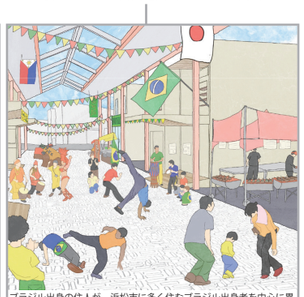
既に行われている「朝市」「ほしの市」に加えて月替わりのイベントを開催。住人が主催者となり、テーマに沿ったそれぞれの『個性』の因子である好きなとこや興味のあることを共有する。住人同士のつながりや近隣住民との交流のきっかけとなる。

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
植物	運動	サブカルチャー	ものづくり	音楽	健康	仮装	芸術	年越し	食	異文化交流	交換

住人たちが運動の日を制定。年齢や国籍が多様な住人がそれぞれスポーツを提案し企画することで、障害があるか、年齢が高いかなどに関わらず全ての人が参加し楽しむことができるイベントに。

「音楽のまち」として知られている浜松市。サザンクロス商店街では毎年 8 月に「サザンクロス音楽会」が開催されている。プロの演奏者から初心者の子供まで、多くの人々が自由に音楽を楽しみ交流する。

ファッションを学ぶ学生がハロウィンに合わせて商店街内外の人々が各々の個性を出しながら仮装を楽しむイベントを企画。参加者からの注文を受けて衣装の制作を行った。飾り付けは参加者が自由に行う。



ブラジル出身の住人が、浜松市に多く住むブラジル出身者を中心に異国の文化に触れられるイベントを企画。近隣に住む様々な人がブラジルの伝統武術であるカポエイラの体験や、各国の料理を味う。